

経済危機下のアフリカ都市 カメルーン・ヤウンデの場合

| | |
|-----|--|
| 著者 | 野元 美佐 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アフリカレポート |
| 発行年 | 1995-09 |
| 出版者 | アジア経済研究所 |
| URL | http://hdl.handle.net/2344/00008494 |

経済危機下のアフリカ都市

カメルーン・ヤウンデの場合



野元美佐

1994年の8月半ばから、95年の2月はじめまで、文部省科学研究費補助金海外学術調査「アフリカにおける伝統都市の社会変化の比較調査」プロジェクト（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・日野舜也団長）により、カメルーンのヤウンデで調査を行なった（同プロジェクトにより、93年にも2カ月間調査を行なった）。カメルーン人女性の家に下宿をしながらのヤウンデの暮らしは、都市で生きるカメルーンの人々の視点から、都市を考える好機でもあった。経済危機といわれるカメルーン経済の不況が、ヤウンデの都市生活をどのように変え、またヤウンデの人々はどのようにそれに対応しているのか、考えてみたい。

多様なヤウンデ都市民

ヤウンデはカメルーン共和国の首都であり、大統領官邸や官庁がある。カメルーンでは、フランス語と英語が公用語となっているが、旧仏領地域に位置するヤウンデでは、フランス語が共通語となっている。人口は、約56万人で、約33万人が移住民である（1987年）。ヤウンデ付近にもともと居住していたベティをはじめ、西部地域のバミレケ、北西部（旧英領）の英語圏の人々、北部のハウサ、

フルベ、といった全国各地の人々がヤウンデに集まっている。またセネガル、マリ、中央アフリカ、ナイジェリアといった外国人も暮らしており、多様な人口構成となっている。

多くのエスニックグループが共生しているからには、それに伴う緊張もある。ルワンダやブルンジで起こっていることも、彼らにはリアリティをもって受けとめられている。しかしその一方、ヤウンデの大きな酒場では、コメディアンが、それぞれのエスニックグループの特徴を誇張したもののまねをやり、ヤウンデっ子の人気を博している。一つのエスニックグループだけを揶揄するのではなく、ベティ、バミレケ、ハウサといった具合に、順番に、平等にやっていく。エスニックグループ間の緊張を笑いに変えて、やわらげる、ヤウンデの人々が作り出した、いかにも都市的なやり方に見える。

CFAフランの平価切り下げと物価

カメルーンをはじめとするフランス語圏アフリカ諸国では、1994年1月にCFAフランの50%の平価切り下げが行なわれた。これまで、1フランスフランに対して50CFAフランで固定されていたレ

ートが、1 フランスフランに対して100CFAフランとなった。この平価切り下げは、ヤウンデの生活においては今のところ、物価の上昇という形でしか反映されていないようだ。

ヤウンデの交通手段は、バスかタクシーである。バスの運賃はタクシーより安いですが、本数や路線が多くないため、最も便利なのは、乗合いタクシーだ。人々は通りに立って、タクシーを止めるために人差し指を横に差し出す。タクシーは、その人のそばでスピードを落とす。人々は口々に「マルシェ・サントラル（中央市場）！」などと叫び、タクシードライバーは、行き先が合えば止まって乗せてくれる。合わない場合はタクシーは無情にも走り去る。基本料金は100CFAフラン（約20円）であったが、平価切り下げの後、125CFAフランに上がった。

ヤウンデの人々は少しでも安く乗ろうと、近距離なら100CFAフランにしりと交渉する。「125払え！」「いや100しか出せない！」、とドライバーと乗客とが口論するシーンも見かけた。乗客も必死だが、ドライバー稼業も決して楽ではないのだ。ヤウンデの交通量の3分の2はタクシーではないか（タクシーは黄色塗装されており、一目でわかる）と思われるくらい、ヤウンデのタクシーは飽和状態にある。当然競争は激しい。オーナードライバーは別として、雇われドライバーになると、まずは車の借り賃、さらにガソリン代を稼がなければあしがでてしまう。ドライバーも乗客も、それぞれに大変なのである。

ヤウンデ市民にとって、タクシーの値上げも痛いですが、食料品の値上げはもっと痛い。週刊誌であるTODAY誌（1994年11月1日）によると、CFAフラン切り下げ前の93年12月と比較して、米1キロ200CFAフランから260CFAフラン、トマト1缶50CFAフランから75CFAフラン、肉1キロ800CFA

フランから1100CFAフラン、といった具合である。食用油の値上げが特に激しく、ピーナッツ油1リットル475CFAフランから900CFAフラン、ヤシ油1リットル350CFAフランから800CFAフラン。日々の料理に使用するものだけに、人々の間では食用油の値段が話題になることが多かった。

筆者が下宿をさせてもらっていた家主の年配の女性は、家の前に小さなワゴンを出し、卵やヤシ油、石鰯などを売っていた。市場の買い出しから帰ってきては、自分の商品の値段を市場の価格にあわせて上げていったが、数カ月の間に売れゆきが悪くなり、彼女はついにその商売をやめてしまった。もっとも彼女の主たる商売は、家の一部を改造してつくった小さな酒屋であった。店の前にベンチを並べ、客がそこで飲めるようになっていた。客のほとんどは顔見知りで、彼女の人間関係によって支えられている。バーの中心商品であるビールの仕入れ値も上がったが、顔見知りで成り立っている商売だけに、売値をすぐに上げるわけにはいかない。儲からないのを承知で商売を続けている彼女に「値上げはしないのか」とたずねると、「値上げをしたら、誰が飲みに来てくれるのか」と逆にたずね返された。

経済危機とインフォーマル・セクター

カメルーン経済は、CFAフランの平価切り下げ以前、1980年代半ばから悪化し始めていた。それまでは、アフリカ諸国の中でも「優等生」とされていた。着実に経済が上向いていると実感できた頃の思いを、人々はよく口にする。不況がますます深まった昨今、人々は過去を懐かしみながらも、なんとかして、今の生活を守ろうとしている。

構造調整政策の影響もあって、フォーマル・セクターに就職口を見つけるのは難しい。就職でき

ても、給与が十分であることは少なく、公務員の給与はしばしば支払いが滞っている。仕方なく人々は、インフォーマル・セクターに生活の糧を見いだす。不況が深まるにつれ、露店の数は増えていく。2, 3年前にはなかったことだが、これまで女性の仕事とされていた焼きバナナ売りなどに、若い男性が従事していたりする。

人々がインフォーマル・セクターに参入していく理由は、フォーマル・セクターに就職口がない、といった消極的なものばかりではなさそうである。不況になれば、人々は物を少しでも安く買おうとする。これまでなら大きな書店で買っていた子どもの教科書を、露店の古本屋で買うようになる。薬は、市場の古着で間に合わせるようになる。薬局で売っているヨーロッパ製の薬をやめ、行商人が売り歩いている安いナイジェリア製の薬を買うようになる。つまり、これまでフォーマル・セクターに流れていた金が、インフォーマル・セクターに流れてくる。大きな店がつぶれ、その前に露店が軒を並べるようになったヤウンデの中心部は、それを如実に物語っている。政府によってときどき一掃される露店は、一週間もすれば元どおりである。続々と新参加者が現われ、インフォーマル・セクター内の競争が激しくなっているのも確かだが、経済危機によって、インフォーマル・セクターは、より儲かる働き口となっている。人々は、それを敏感に感じとり、インフォーマル・セクターに参入している。消費者の立場からみれば、インフォーマル・セクターで物を買うことによって出費を抑え、生活を切り詰めることができるのだ。

経済危機と頼母子講

次に、経済危機と頼母子講の関係についてみていきたい。ヤウンデには、頼母子講の組織が多く

存在する。そこでは、定期的に人々が集まって金を出し合い、メンバーの一人にその全額を渡し、次はまた違う人が受け取り、これをそのメンバーが全員受け取るまで続けていく。一種のインフォーマル金融である。この頼母子講組織は、カメルーンでは特に、バミレケという西部地域の人々の間で発展してきた。ヤウンデにも多くのバミレケの人々がおり、出身地の村ごと、親族、友人などでメンバーを募り、頼母子講の集会を開く。この頼母子講は、経済危機にあって、ますますその存在意義をもってきているようだ。

頼母子講では、メンバー間の信頼に重点がおかれている。どんな事情があっても、金の不払いは許されない。それは、メンバー全員を裏切る行為になる。そのため人々は、なんとしても金を支払い続ける。

また、ほとんどの頼母子講組織は、葬式などの不意の出費に備えた貯蓄も行なっている。メンバーの身内に死者が出れば、その貯蓄を使う。また、メンバー全員が出資して、葬式時の飲み物や食べ物の一部を負担する。メンバーが関わる葬式には、組織のメンバー全員の出席が義務づけられている。葬式は、生活が苦しくてもやらなくてはならない。そのため、万一の時に力になってくれる頼母子講組織への参加は、人々にとって一層重要になっている。

しかし定期的に金を支払うためには、ある程度の収入のめどが立っていないとてはならない。なかには頼母子講への参加が困難になる人もいる。頼母子講の分担金も、高額なのは減ってきていた。しかし頼母子講を離れた人も、生活に少しでも余裕ができれば、すぐにでも参加しようとするのも事実である。

この頼母子講組織は、バミレケの人々が中心になって行われていたのだが、他のエスニックグル

ープの人々も頼母子講を組織し始めている。バミレケは商売の民といわれ、ヤウンデ経済においても中心的役割を担っている。特にインフォーマル・セクターにおいてバミレケの占める割合は高い。不況の中でも着実に資金をため、自分の商売に活かしているバミレケの人々が注目されるに従い、彼らの資金づくりを担っている頼母子講組織が注目を集め、他にも普及していったのである。

本当に経済危機なのか？

ヤウンデに暮らしていると、本当に経済危機なのか、と考えさせられる場面も多い。

町中のディスコや酒場は、週末ともなると、溢れんばかりの人である。「人におごってくれと言われたときだけ、『経済危機なんだから無理だ』と答える。経済危機と言っても、ヤウンデの生活はそう変わっていない」、そう言い切る人もいる。

ヤウンデの郊外には新興住宅街が今も広がり続けており、パラボラアンテナをつけた大きな二階建ての家々が建ち並んでいる。家の持ち主の多くは、バミレケの人々である。ニューリッチ層の彼らは「ビジネスマン」—アフリカの文脈で言えば、自分でビジネスをやっている人—である。彼らの中には、カメルーン国内だけでなく、ナイジェリアや、フランス、さらには香港などのアジア諸国と取引する者もいる。彼らの商売は、経済危機にあっても順調なようだ。彼らをはじめ、カメルーンの大金持ちの多くが、インフォーマル・セクターのような小規模な商売から出発して成功して

いる。そのため、インフォーマル・セクターで商売をすることは、当座をしのぐだけでなく、いつか成功して金持ちになれるかもしれない希望の道でもある。ござと日傘だけの店から、いつの日か屋根のある店舗を持ち、大きな店にして海外から商品を輸入する、といった夢がもてるのである。

この夢が破れても、彼らには自らを慰める術がある。たとえばバミレケの金持ちは邪術を使っている、という噂がある。彼らは金持ちになるため、家族や自分の命の一部とひきかえに、邪術を使って金持ちになった、というのである。この話をしてくれる人々は必ず、「そこまでして金持ちにはなりたくはない、金だけがすべてじゃない」とつけ加える。邪術を使えば金持ちにはなれるけれど、自分はやらない。だから、自分は貧乏だけれど、それでも構わない。こうして彼らのプライドは保たれることになる。1980年代半ば以降、経済の悪化につれて広まったその邪術の噂は、経済危機を生きる人々には欠かせないものだったのかもしれない。

ヤウンデに犯罪が増えているのは確かである。政府、大統領への不満も大きく、現政権と密接な関係にあるフランスへの反発も激しい。が、カメルーン社会がそれほど危機的状況にあるとは思えない。それは人々が、インフォーマル・セクター、頼母子講、邪術の噂など、経済危機を社会の危機にしない知恵を働かせているからだろう。そして筆者が知り得なかった知恵が、まだまだたくさんアフリカの都市社会にはあるように感じている。

(のもと・みさ／日本女子大学大学院)